

院生インタビュー

文学研究科

亀田 俊和

今回、院生インタビューに登場していただくのは文学研究科の亀田俊和さん。カフェテリアルネの丼・麺コーナーでバイトをしていらっしゃる、ご存じの方もいらっしゃるでしょう。そんな亀田さんに研究・院生生活についてお話を伺いました。

としたか
亀田 俊和

所属：文学研究科 研修員

研究テーマ：南北朝期の政治史

平成5年京大文学部入学

9年文学研究科修士課程入学

12年同研究科博士後期課程入学

15年同研究科研修員



～研究について～

主に南北朝期の室町幕府の政治史を研究しています。政治史の中でも、具体的には訴訟制度、特に恩賞宛行の制度・歴史についてです。手柄を立てた武士が將軍から恩賞として新しい土地をもらうこの制度において、どのように恩賞が実現したかを専門にしています。

室町幕府も鎌倉時代の御成敗式目が基本法典なんですけど、さらに建武式目も制定して、鎌倉幕府と同じように追加法をどんどん出していくんですよ。その追加法の条文と、裁許状という幕府の下した判決文が多く残っています。恩賞宛行に関しては將軍足利尊氏の下文という形式の文書があります。そういった資料はか

なり活字本になっていて、できるだけ網羅的に収集し、内容や形式がどう変化していくのかを大きく捉えていきます。世に出した論文はあまりないんですけど、その論文では「執事施行状」という判決を実行に移すための文書を扱いました。これは鎌倉時代にはなかったもので、最初は制度として固まっていなかったんですけど、室町幕府初代執事の高師直がこういう文書をいっぱい出して、だんだん原則化・パターン化していった。で、最後に管領の細川・斯波とかに繋がっていったんじゃないか、ということを書きました。このような感じで原則や法則といったものを見出すということをやっています。

本史の中でも室町幕府は子供の頃から気になる存在でした。鎌倉北条氏の執権政治、徳川三百年の太平の世、という偉大な2つの政権に挟まれて、尊氏・直義の争い、六代將軍足利義教殺殺、応仁の乱などネガティブなイメージしかない。歴史学でも室町幕府に対する評価が低いんです。僕はあまのじゃくで、そういうのが気になるタイプなんです。また、高校の時にNHKの大河ドラマで「太平記」が放映されて、今の「新選組!」みたいに関連した本がいっぱい出たんですよ。それらを買って読んでいくうちに、いいなあと思いました。その後、大学入ってから西洋史にしようかと悩んだり、哲学科に行こうかとも思ったりしたんですけど、結局日本史に落ち着きました。



～研究のきっかけ～

高師直、足利尊氏、その弟の足利直義らが仲間割れして戦うんですが、その理由に興味を持ったのが事の発端です。最初は直義が勝ちますが、その後直義に味方した武士がなぜか寝返って最後は負けてしまいます。これはなぜなんだろう？と。まあ、小学校の頃から日本史が好きで、あとガリレオやニュートンとかも好きで、とにかく将来どんな分野でもいいから学者になりたいかったです。高校で化学が苦手になって理系の道を諦めて、どの分野に進もうかと思ったんですが、そういえば日本史が好きだったなど。日

～挫折、そして転換～

修士の時、修論が書けなくて一年留年したんですよ。初期の室町幕府は、尊氏が恩賞宛行、直義が裁判関係というように権限を分割しており、最初は直義の裁判の研究をして、先行研究も批判してみたんですが、どうしても自分でもぼつとできなかった。結局オリジナリティが出せないで、それほど進んでいない尊氏の恩賞宛行の研究をやってみようと思ったんです。文書はいっぱいあるのにしぼら

はみだし
すてーじ

机の隅に「アンパンマンの体は何でできているんだろう？」と書いてあって、授業に集中できなかった。

(経・3 ラッシー)

く何も出てこなかった。どうしようかなとか思っている時に、尊氏の下にいる執事の高師直の存在に注目しました。この人が尊氏の恩賞を実現させるように諸国の守護に命令を出しており、これがさっき言った執事施行状なんですけど、この重要性に気付いてからはこれを中心に研究を進めました。そうしたら道が開けたんですよ。結果、うまくいって、今までは比較的進んでなかった尊氏の恩賞宛行と執事施行状の機能・役割についての研究が評価されるようになったと思います。

～論文～

僕の場合、修論で苦しむこともあったんですけど、博士入ってから論文を投稿するほうがもっと大変です。修論までとは違って、雑誌などに載せるとなると読む人のことも考えて書かないとダメなんです。自分の書きたいように書くだけではダメで、例えば表現や文章の構成を工夫しなければならぬ。僕はそういうのがてんでダメなんです。なかなか他人に評価してもらうのが難しくて一本目を載せるまで相当苦労しました。修士の時に結構勉強したのですが、修論にしたのは一部分に過ぎなくて、残りを小出しにしながら論文を書いています。ちょっと出す時にもう一回勉強し直して補強する。みんな言いますね、修論の遺産だって。どの研究者の方も修論が基盤になって、そこから雑誌に論文を出したり、発展させているようです。

～研究生活～

とにかく論文を書いて出すという生活になります。研究会などで発表することもあるので、その準備もしています。研究室は論文などをコピーする時しか使っていないですね。論文を書く時は部屋のパソコン。論文を読むのは図書館です。特

に今出川の私設図書館。ものを考えるのはバイトで皿を洗っている時かな(笑)。あと、教授のゼミに週一で行ったり、研究会も2つぐらい出ています。院生とかがやってる研究会がいっぱいあって、4つも5つも出ている人は物凄く勉強していて大変そうですね。また、博士課程になると学会の仕事もありますね。

～将来の進路・目標～

どんな形でも研究に携われる職につけたらと思います。今後研究を進めていくと、最後は大きなテーマに行き着くわけです。例えば、恩賞宛行とか所領安堵というのはいったい何なのか？ 将軍が武士に宛がったり安堵したりという行為は封建制度の主従制度根幹に関わる部分なので、それをもっと突き詰めていくと日本の中世の国の国政・枠組み・あり方みたいな壮大なテーマになっていくと思うんです。今はまだ執行システムの解明にとどまっているところですけど、そういうのをもっと打ち出していったら一生のテーマになるでしょう。さらには現代の国のあり方にも繋がってくると思うんですよ。そういうのが言えれば歴史に名を残せる研究者になれるんじゃないかなと思っています。

～バイト、皿洗いからの再スタート～

仕送りも少しありますがバイトでの収入が大半です。修士課程の頃の仕送りは学部時代と変わらなかったんですけど、博士課程から奨学金をもらえるようになったんで減りました。研修員になって奨学金がなくなってからの収入はバイトに頼ってますね。M1の終わりぐらいからカフェテリアルネでバイトをしています。学部時代は家庭教師とか塾講とかいろいろしてたんですけど、失敗ばかりでやる気無かったんですよ。それでクビになっ



たりすることが多かったんで、働くことにコンプレックスがあったんです。受験バイトがほとんどで、僕の場合これはプライドの表れだな、とか思いました。一から皿洗いだと、基本からやり直そうと自分で勝手に思っただけで、でもやっぱり、最初は仕事できなくて苦労しましたよ。皿も満足に洗えねえのだった。今はレギュラーは週四で、さらに追加でシフトに入っています。結構がんばっているんですが、月10万ちょっとがやっとです。ルネのバイトの一番良いところは、他人に貢献できることだと思いますよ。皿洗いでも丼・麺コーナーに入っても、なにしてもね。600年前の足利尊氏が何したかなんてというのは直接的には人の役には立たない。むしろ、無意味なことをしているような側面もあって、そういう意味では直接的に役に立ってるルネでの仕事は僕の中では自信の源です。お客さんの為にも貢献できるし、パートやバイトや職員の為にもなれるし、失敗して足を引っ張ることもあるけど、それで頑張れる。いろんなことを教えてもらいましたしね。

～メッセージ～

僕らが学部生の頃と比べると今の学部生のほうがはるかに大人だなと思いますね。人間的にもいい人が昔に比べてもいっぱいいますね。だから、自信を持って好き放題、自由に、思う存分、やりたいように勉強でもスポーツでもされたら楽しいんじゃないかなと思います。

— ありがとうございます。

研修員制度

学部・研究所などにおいて高度の専門知識を有する者が、博士課程修了後などに最大2年まで研修員として京大に籍を置くことができる。公募はなく、指導教員の許可が必要で、文学研究科で約40～50名程度。入学金・研修料を支払わなければならない。待遇・サービスは京大大学の職員に準じる扱いとなり、厳密には院生ではないが、本記事ではその生活実態・意識・研修料を払っていることなどから院生インタビューとして掲載。

はみだし
すてーじ

月刊ドラゴンズを吉田ショップに毎月入荷して下さい。

(文・1 ガルクーシャ)